

## 写像ってなんすか

「写像」... 某論破王の影響で言葉事態は知っている人が多いかもしれない。ただ、その意味について考えたことはあるだろうか？おそらくほとんどの人は「写像」の意味を知らないと思う。そこで今回はこの「写像」について学んでみよう。~~何んが某論破王を論破したいの？~~

### i 対応ってなんすか

数学では、集合と並んで基本的な概念として**対応**というものがある。その定義を述べると、

$A, B$  を二つの集合とし、ある規則  $\Gamma$  によって  $A$  の各元  $a$  にたいしてそれぞれ一つずつ  $B$  の部分集合  $\Gamma(a)$  が定められるとする。そのとき、その規則  $\Gamma(a)$  のことを  $A$  から  $B$  の**対応**という。

さらに、 $A$  の元  $a$  にたいして定まる  $B$  の部分集合  $\Gamma(a)$  を、 $\Gamma$  による  $a$  の像という。また、 $A, B$  をそれぞれ対応  $\Gamma$  の始域（定義域）、終域という。またこのとき、 $B$  の部分集合のうち同じものがあってもよいし、部分集合が空集合であるような元が存在してもよい。つまり、 $\Gamma(a) = \Gamma(a')$  ( $a \neq a'$ ) であってよいし、 $\Gamma(a) = \phi$  であるような  $a$  があってもよい。ちなみに、 $\Gamma$  が  $A$  から  $B$  の対応であることを  $\Gamma: A \rightarrow B$  と表す。

とはいえ、これだけ聞いてもイメージしにくいので現実世界に置き換えて考えてみよう。  
たとえば、トマラーに友達といった時を考えてみる。このとき、自分と知り合いを含めた客 (Customer) は、お店に対してメニュー (Menu) から料理 (元) を選ぶはずだ。この客が選ぶ料理とメニューに載っている料理の関係がまさに対応である。客の集合  $C$  の各元はメニューの集合  $M$  から料理 (元) を一つでも複数でも選ぶ。その選んだ品物の集合は  $M$  の部分集合になっているはずだ。このとき、客ごとに選んだ料理の品はかぶってもいいし、かぶらなくてもいい。もちろん一つも料理を頼まずお冷とおしぼりだけ頼む客もいるだろう（ほんとはよくない）。

### ii 写像ってなんすか

さて、ここから本題の写像について考える。とはいえ写像は対応がとある性質を持つ場合のものであるため、ほとんど対応と同じみたいなのである。その性質とは、

$A$  の任意の元  $a$  に対して、 $f: A \rightarrow B$  である対応  $f$  の  $f(a)$  は  $B$  のただ一つの元からなる集合である。

つまり**写像**とは $A$  のどんな元に対しても  $B$  の元を一つに対応させる規則のことである。

先ほどの対応との違いは対応先が一つの元であるところである。そのため対応を説明する際の例は写像ではない。逆に、我々になじみのある  $f(x) = x^2$  は、ある実数の集合  $\mathbb{R}$  の元  $x$  に対して実数の集合の元  $x^2$  が対応しているので写像である。なお、 $f(x) = x^2$  のように終域が数字である場合は**関数**といい、それ以外の場合は写像ということが多い。

写像ではない例としては逆三角関数がある。例えば、 $\arcsin x$  は  $-1 \leq x \leq 1$  の実数  $x$  に対して無限個の値

が存在する。(ただ実際は主値を取っている。 $\text{Arcsin } x$  なら  $-\frac{\pi}{2} \leq \text{Arcsin } x \leq \frac{\pi}{2}$ )

写像  $f: A \rightarrow B$  によって  $A$  の元  $a$  に  $B$  の元  $b$  が対応するとき、 $b$  を  $f$  による  $a$  の像といい、 $b = f(a)$  と表す。このとき、 $a$  を  $f$  による  $b$  の原像または逆像といい、 $a = f^{-1}(b)$  と表す。<sup>\*1</sup>

中学生でもわかることだが、関数  $f(x) = 4x^2$  と関数  $g(x) = (2x)^2$  は  $\mathbb{R}$  のどんな元  $x$  についても  $f(x) = g(x)$  が成り立つ。同じように、 $f: A \rightarrow B$  である写像  $f$  と  $g: A \rightarrow B$  である写像  $g$  が、 $A$  のどんな元  $a$  についても常に  $f(a) = g(a)$  となるとき、写像として等しいといい  $f = g$  と表す。もちろん等しくないときは  $f \neq g$  で表す。

### 問題

$A, B$  がそれぞれ  $m$  個,  $n$  個の元からなる有限集合のとき、 $A$  から  $B$  への対応は全部でいくつあるか。また、写像はいくつあるか。ヒント：まずは  $A$  の一つの元について考えてみよう。

### 解答

まず  $A$  の集合の元の一つ  $a_1$  について考えてみよう。このとき  $A$  から  $B$  の対応は  $2^n$  個ある。なぜなら、 $a_1$  に対して  $B$  の一つの元に対応する場合は  ${}_nC_1$  個、二つの元に対応する場合は  ${}_nC_2$  個、三つの元に対応する場合は  ${}_nC_3$  個... $n$  個の元に対応する場合は  ${}_nC_n$  個あり、一つの元も対応しない場合も合わせると

$$1 + {}_nC_1 + {}_nC_2 + \cdots + {}_nC_n = 2^n$$

となるからである。(この計算は基礎数学 1 問題集の step up 464 等を参照するといい。もちろん重複順列の計算(それぞれの元を対応させるさせないの 2 通り)でもよい。) 同様に写像についても考える。写像の場合は、一つの元  $a_1$  に対して  $B$  の元が一つ対応するわけだから、その数は  $B$  の元の数と同じになる。よって  $n$  個。

次に、 $A$  のすべての元について考える。対応は  $a_1$  のときは  $2^n$  個あり、元は  $a_1, a_2, \dots, a_m$  とあるわけだから、 $2^n \times 2^n \times \cdots \times 2^n = (2^n)^m = 2^{mn}$  となり、答えは  $2^{mn}$  個となる。同様に、写像も  $n \times n \times \cdots \times n = n^m$  となるため、 $n^m$  個となる。

対応は  $2^{mn}$  個, 写像は  $n^m$  個

---

<sup>\*1</sup> 基礎数 1 で習う逆関数をイメージしてみるとわかりやすい

### iii 合成写像ってなんすか

三つの集合  $A, B, C$  があるときに、 $A$  から  $C$  までの写像を  $B$  を経由して考えることができる。つまり、 $f: A \rightarrow B$   $g: B \rightarrow C$  とすると  $A$  から  $C$  までの写像は  $a \in A$  として  $g(f(a))$  となる。これを  $f, g$  の合成または合成写像といい  $g \circ f$  と表す。

#### 問 5.1

二つの写像  $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$   $g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  を  $f(x) = x + 2, g(x) = x^2 + 1$  で与える。合成写像  $f \circ g, g \circ f, f \circ f, g \circ g$  を式で表せ。

#### 解答

$$f \circ g = (x^2 + 1) + 2 = x^2 + 3$$

$$g \circ f = (x + 2)^2 + 1 = x^2 + 4x + 5$$

$$f \circ f = (x + 2) + 2 = x + 4$$

$$g \circ g = (x^2 + 1)^2 + 1 = x^4 + 2x^2 + 2$$

次に合成写像の結合法則について

写像  $f: X \rightarrow Y, g: Y \rightarrow Z, h: Z \rightarrow W$  の合成について、等式

$$h \circ (g \circ f) = (h \circ g) \circ f$$

が成り立つ。

■証明 各元  $x \in X$  に対して、

$$[h \circ (g \circ f)](x) = h((g \circ f)(x)) = h(\underbrace{g(f(x))}) = (h \circ g)(f(x)) = [(h \circ g) \circ f](x)$$

が成り立つ。□

#### iv 像ってなんすか

$f: A \rightarrow B$  を写像とする。 $A$  の部分集合  $A'$  に対して、 $B$  の部分集合  $\{f(a) \mid a \in A'\}$  を  $f$  による  $A'$  の像といい、 $f(A')$  と表す。 $B$  の部分集合  $B'$  に対して、 $A$  の部分集合  $\{a \in A \mid f(a) \in B'\}$  を  $f$  による  $B'$  の原像または逆像といい、 $A' = f^{-1}(B')$  と表す

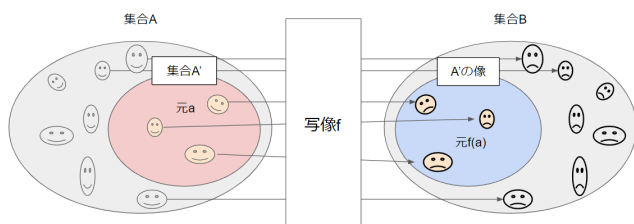


図1 像のイメージ図

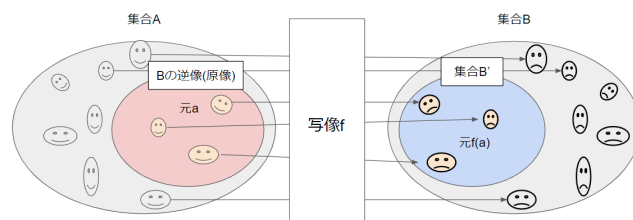


図2 逆像のイメージ図

$f: A \rightarrow B$  を写像とする。 $A$  の部分集合  $A_1, A_2$  および  $B$  の部分集合  $B_1, B_2$  に対して、次式が成り立つ。

$f(A_1 \cup A_2) = f(A_1) \cup f(A_2)$	$  A_1$ と $A_2$ の和集合の像は $A_1$ の像と $A_2$ の像の和集合	(1)
$f(A_1 \cap A_2) \subset f(A_1) \cap f(A_2)$	$  A_1$ の像と $A_2$ の像の共通部分は $A_1$ と $A_2$ の共通部分の像を含む	(2)
$f^{-1}(B_1 \cup B_2) = f^{-1}(B_1) \cup f^{-1}(B_2)$	$ $	(3)
$f^{-1}(B_1 \cap B_2) = f^{-1}(B_1) \cap f^{-1}(B_2)$	$ $	(4)
$A_1 \subset f^{-1}(f(A_1))$	$  A_1$ の像の逆像は $A_1$ を含む	(5)
$f(f^{-1}(B_1)) \subset B_1$	$ $	(6)
$f(A_1) - f(A_2) \subset f(A_1 - A_2)$	$ $ ※差集合 $A - B$ は $A$ に含まれて $B$ に含まれない元の集合	(7)
$f^{-1}(B_1) - f^{-1}(B_2) = f^{-1}(B_1 - B_2)$	$ $	(8)

図でイメージするとなんとなくのイメージはつかみやすいかもしれない。

とはいえ、ただ式を並べただけでは「なんかそういうデータってあるんすか？」と言われてしまうので、簡単に証明もしておこう。

■証明 まずは、(1) を証明する。

左辺の  $f(A_1 \cup A_2)$  は、 $\{b \in B \mid b = f(a) \text{ となる元 } a \in A_1 \cup A_2 \text{ が存在する}\}$  と書ける。なぜなら、 $f$  は  $A \rightarrow B$  の写像だからこの集合の元は必ず  $B$  の元となるはずであり、さらに写像の定義<sup>\*2</sup>とかつこの中身から  $b = f(a)$  ( $a \in A_1 \cup A_2$ ) を満たす  $a$  が存在することが条件であるからである。

ここで下線部の条件は  $A_1 \cup A_2$  から

$\{b \in B \mid b = f(a_1) \text{ となる元 } a_1 \in A_1 \text{ または } b = f(a_2) \text{ となる元 } a_2 \in A_2 \text{ が存在する}\}$

と言い換えられる。次に下線部のところに着目するとこれは  $b \in f(A_1)$  と書き換えられる。<sup>\*3</sup>「または…」以降も同様に書き換えると、 $\{b \in B \mid b \in f(A_1) \text{ または } b \in f(A_2)\}$  となる。これはまさに右辺の式そのものとなる。□

<sup>\*2</sup>  $A$  のどんな元も  $B$  の元を一つに対応させる規則

<sup>\*3</sup> このページの一行目を参照

(1) の証明を式で書くと次のようになる。

$$\begin{aligned} f(A_1 \cup A_2) &= \{b \in B \mid b = f(a) \text{ となる元 } a \in A_1 \cup A_2 \text{ が存在する} \} \\ &= \{b \in B \mid b = f(a_1) \text{ となる元 } a_1 \in A_1 \text{ または } b = f(a_2) \text{ となる元 } a_2 \in A_2 \text{ が存在する} \} \\ &= \{b \in B \mid b \in f(A_1) \text{ または } b \in f(A_2)\} \\ &= f(A_1) \cup f(A_2). \end{aligned}$$

通してみると意外とあっけない。

次に (2) を証明する。こちらも (1) と同様に  $f(A_1 \cap A_2)$  は  $\{b \in B \mid b = f(a) \text{ となる元 } a \in A_1 \cap A_2 \text{ が存在する} \}$  と書ける。この次がポイントでこの集合は

$\{b \in B \mid b = f(a_1) \text{ となる元 } a_1 \in A_1 \text{ および } b = f(a_2) \text{ となる元 } a_2 \in A_2 \text{ が存在する} \}$   
に含まれているといえる。

なぜなら、この条件「 $b = f(a_1)$  となる  $a_1 \in A_1$  および  $b = f(a_2)$  となる  $a_2 \in A_2$  が存在する」は  $A_1$  に含まれる元の条件と  $A_2$  に含まれる元の条件であるのに対し、最初の条件は  $A_1 \cap A_2$  に含まれる元の条件となっており、元が含まれる元の集合は明らかに前者のほうが大きいためである。おそらく何言ってるかわからないと思うので例を出すと、 $A_1$  と  $A_2$  の対称差<sup>\*4</sup>の元は、始めの条件の適応外であるが後の条件の範囲内である。

さらにこの条件は (1) 同様、 $\{b \in B \mid b \in f(A_1) \text{ かつ } b \in f(A_2)\}$  と書き換えられるので、右辺の式そのものとなる。□

これも、式で書くと次のようになる。

$$\begin{aligned} f(A_1 \cap A_2) &= \{b \in B \mid b = f(a) \text{ となる元 } a \in A_1 \cap A_2 \text{ が存在する} \} \\ &\subset \{b \in B \mid b = f(a_1) \text{ となる元 } a_1 \in A_1 \text{ および } b = f(a_2) \text{ となる元 } a_2 \in A_2 \text{ が存在する} \} \\ &= \{b \in B \mid b \in f(A_1) \text{ かつ } b \in f(A_2)\} \\ &= f(A_1) \cap f(A_2). \\ \therefore f(A_1 \cap A_2) &\subset f(A_1) \cap f(A_2). \end{aligned}$$

(1) に比べて難しかったと思う。「なぜなら...」のところは図を書いてみると分かりやすいかもしれない。

次は (3) を証明する。

(4) は省略する。演習問題で解く。

---

<sup>\*4</sup>  $A_1$  のみの元の集合と  $A_2$  のみの元の集合の和集合